

「日本は中国で何をしたか—侵略と加害を考える—」講演会

会場いっぱいの参加で、「日中戦争論」を熱心に学ぶ



日中友好協会大阪府連の取組みとして、8月25日午後よりエルおおさか南館5階ホールで、南京事件研究で名高い笠原十九司先生（都留文科大学名誉教授）をお招きして「日本は中国で何をしたか—侵略と加害を考える—」講演会を開催しました。

会場定員分の210部の資料を用意しましたが、50部以上も不足してしまいました。レジメもなくお聞きいただいたみなさんには、後日自宅郵

送いたしました。まことに申し訳ありませんでした。

「歴史認識の重要性、重慶爆撃の真相」が理解できた

大阪府連として、2015年7月に500名規模の行事を単独で取り組んで以来、この間の不再戦月間の取組みは12月の南京映画祭等、実行委員会メンバーとしての取組みでした。今年は単独の行事も取り組もうと決めて、5月のメーデー会場での宣伝を皮切りに8000枚のチラシ配布、諸団体、マスコミにも協力いただき進めました。

感想・アンケートも76名から寄せられ、講演についての声は、「講師が現下の情勢を踏まえて、歴史認識の重要性と戦争前夜の段階を許さない意識を喚起してくれた」という感想があった反面、「テーマそのもののお話しに期待したがあてがはずれた」という感想も20名ほどからありました。「70分ではもったいない、1日かけてやれば十分両方ができたのではないか」という建設的なご意見もありました。

笠原氏の日中戦争論の特徴を解説

コメンテーター役の副島昭一和歌山大学名誉教授が、笠原氏の日中戦争論の特徴は、「日本政治の動向、日本軍内部派閥、人脈、人事などにわたる立ち入った分析に加えて国民党・共産党・傀儡政権等、中国側の動向分析を踏まえた総合的観点からの日中戦争



の分析・叙述である」と指摘され、「戦争の前史・前夜について」も、二十一ヵ条要求の強要が「前史」の始まりで、張作霖爆殺事件・治安維持法の改正が「前夜」への転換点、海軍の役割の重視、加害責任の重視などの学術的業績を評価され、そのコメントで参加者は理解が深まりました。笠原先生が、従来の「太平洋戦争」という呼称から、「アジア太平洋戦争」という呼称が使われたのは副島先生が提唱して広まったということを紹介されると会場は驚きと賞賛の声が上がりました。

不再戦の思いをさらに強く

大阪府連の全会員の 2 割近い参加もうれしいことです。会員外の方の参加が主催者の予想を大きく上回りました。今回の取組で、1 名が会場で入会され、アンケートの「日中友好協会への加入を検討する」という人が 5 名もおられました。先生の著作「日中戦争全史」上下巻 10 セットが、開会前で完売し、ブックレット「日本は中国で何をしたか」70 冊も完売しました。講演に先立ち、オープニング企画としてシンガーソングライターの野田淳子さんが卒業式でよく歌われる「蛍の光」を例に、明治以降、小学唱歌に隠された戦意高揚、戦争推進の狙いを語り、平和への思いを澄んだ声で参加者に披露しました。たくさんの方の参加で不再戦の思いを強くした取組みでした。 (松尾豊 日中友好協会大阪府連)